

## 教官の特別指導　～新兵が堕ちる訓練という名の調教～

### 第1話「入隊初日～身体検査の罠～」

桜井陸は、訓練所の正門をくぐった瞬間、背筋を冷たいものが走るのを感じた。四月の朝はまだ肌寒く、制服の下が肌粟立つ。深呼吸をして、胸の奥の緊張を押し込める。

大学を中退してから半年。何かを成し遂げたいという漠然とした思いが、彼をこの場所に導いた。自衛隊。規律と秩序の世界。ここでなら、自分を変えられるかもしれない。

「新兵は第三訓練棟に集合！」

拡声器から響く声に、陸は慌てて走り出した。同じように駆けていく若者たちの姿が、あちこちに見える。みんな、自分と同じように緊張した顔をしている。

訓練棟の前に到着すると、既に三十人ほどの新兵が整列していた。陸もその列の後ろに並ぶ。隣に立った男が、小さく息を吐いた。

「緊張するな」

茶色がかった髪、がっちりした体格の男だった。陸より少し背が高い。

「ああ、そうだな」

陸は小さく頷いた。名前を聞こうとした瞬間、建物の扉が開いた。

現れたのは、一人の男だった。

身長は百八十センチを超えているだろう。引き締まった体つきが、制服の上からでもはっきりと分かる。短く刈り上げた髪、日焼けした肌、そして何よりも――鋭い眼光。その視線が新兵たちの列をゆっくりと舐めるように移動していく。

陸の心臓が、どくんと大きく跳ねた。

「俺が教官の神崎鋼太郎だ」

低く、よく通る声。

「お前らは今日からここで、一人前の隊員になるための訓練を受ける。甘えは許さん。弱音も許さん。できない理由を探すやつは、今すぐ帰れ」

誰も動かない。神崎の視線が、また列を移動する。今度は一人一人を、じっくりと見ているようだった。

その視線が陸に止まった。

息が詰まる。神崎の目は、何かを探るように陸を見つめている。値踏みするような、冷たい目。陸は反射的に視線を逸らしそうになったが、必死でこらえた。教官と目を合わせないなんて、そんなことをしたら

「お前」

神崎が陸を指差した。

「名前は」

「さ、桜井陸です」

声が少しうわずった。恥ずかしい。陸は唇を噛んだ。

「桜井か。覚えた」

神崎はそれだけ言うと、視線を次の者に移した。

陸はほっと息をついた。何だったんだ、今の。妙な緊張感が、まだ体に残っている。隣の男が、小声で囁いた。

「お前、目えつけられたんじゃないか」

「え？」

「あの教官、何か気に入ったやつは徹底的に鍛えるって噂だぜ」

「そ、そうなのか……」

陸は不安になった。別に目立ちたいわけじゃない。ただ、真面目に訓練をこなして、普通に過ごしたいだけなのに。

神崎の説明が続く。訓練の概要、施設の案内、規則の確認。陸は必死でメモを取った。真面目にやっていたら、大丈夫だ。そう自分に言い聞かせる。

「では、今から荷物を各自の部屋に運び、午後は基礎体力測定を行う。その前に――」

神崎が資料に目を落とした。

「全員、健康診断を受けてもらう。順番に医務室に來い。まずは……」

彼の指が、リストをなぞる。

「桜井陸」

心臓が跳ね上がった。

「お前が一番だ。午後三時、医務室に來い」

「は、はい」

陸は返事をした。周りの新兵たちの視線が、ちらちらと自分に向けられているのが分かる。なぜ自分が最初なんだ。でも、健康診断なら別に普通のことだ。深く考える必要はない。

それでも、神崎の目が自分を見たときの、あの冷たい感覚が忘れられなかった。

午後三時。

陸は医務室の前に立っていた。白い扉には「医務室」

とだけ書かれたプレートが掛かっている。中から物音は聞こえない。

深呼吸をして、ノックをした。

「入れ」

神崎の声だ。陸は扉を開けた。

室内は思っていたより広かった。白い壁、診察用のベッド、棚には医療器具が整然と並んでいる。窓にはブラインドが下ろされ、外の光を遮っている。

神崎が白衣を着て、椅子に座っていた。その姿に、陸は一瞬違和感を覚えた。教官が医務官も兼ねているのだろうか。

「桜井、か」

「はい」

「健康診断を行う。指示に従え」

「はい」

神崎が立ち上がり、陸に近づいてくる。その大きな体が自分の前に立つと、圧迫感で息苦しくなる。

「まず、服を脱げ」

「え？」

「身体測定だ。制服では正確な数値が測れん」

そう言われれば、確かにそうだ。陸は頷いて、制服のボタンに手をかけた。上着を脱ぎ、シャツを脱ぐ。神崎の視線が、自分の肌を見ている。陸の肌は白く、筋肉もそれほどついていない。少し恥ずかしい。

「ズボンも」

「は、はい」

ズボンを脱ぐ。下着姿になった陸を、神崎がじっと見つめている。その目に、値踏みするような光があった。

「下着も脱げ」

「え……あの、でも」

「正確な測定には全裸が必要だ。指示に従え」

神崎の声には、有無を言わさぬ強さがあった。陸は躊躇したが、命令には従わなければならない。それがここでのルールだ。

下着に手をかける。ゆっくりと下ろす。自分の性器が露わになる。陸は思わず股間に手を当てそうになったが、それもまた恥ずかしい行為だと思い、手を横に垂らした。

「よし、こっちに来い」

神崎が診察台を指差す。陸は素足で冷たい床を歩き、台の前に立った。

「身長、体重を測る。台に乗れ」

陸は台に上がった。冷たい金属が足の裏に触れる。神崎が身長計を頭に当て、数値を読み上げる。

「百七十二センチ。体重……六十三キロ。やせ型だな」

「は、はい……」

「ここでの訓練で、体を作り直してやる」

神崎の手が、陸の肩に触れた。大きく、硬い手。その手が肩から腕、胸へと移動していく。触診だと分かっている、全裸で触られることの羞恥に、陸の顔が熱くなる。

「筋肉が足りん。特に上半身だ」

「すみません……」

「謝る必要はない。それを鍛えるのが俺の仕事だ」

神崎の手が、陸の腹部を撫でる。そして腰、太もも。全身を隈なく触られていく。医学的な触診のはずなのに、どこか妙な感覚があった。

「次は、より詳細な検査だ。四つん這いになれ」

「よ、四つん這い……ですか」

「そうだ。肛門と直腸の健康状態を確認する。隊員として、内臓疾患は見逃せん」

神崎の説明は合理的に聞こえた。でも、四つん這い。その姿勢で、自分の一番恥ずかしい部分を――

「早くしろ。時間は限られている」

陸は諦めて、診察台の上で四つん這いになった。冷たい台が手のひらと膝に触れる。自分の尻が、神崎の方を向いている。この状態で、自分がどんな風に見えているのか想像すると、顔から火が出そうだった。

「力を抜け」

神崎の声が背後から聞こえる。次の瞬間、冷たいものが尻の割れ目に触れた。

「ひっ」

陸は思わず声を上げた。

「動くな。消毒だ」

アルコールの匂いがする。冷たい液体が肛門の周りを濡らしていく。そして、何かが肛門に押し当てられた。

「これから指を入れる。深呼吸しろ」

「ま、待って——」

陸の言葉を無視して、神崎の指が侵入してきた。ゴム手袋をした太い指。ローションが塗られているのか、ぬるぬるとした感触。肛門の括約筋が、異物を押し出そうと収縮する。

「力を抜け。そうしないと痛いぞ」

陸は必死で体の力を抜こうとした。でも、うまくいかない。指が少しずつ奥に入っていく。ずるずると、内壁を擦りながら。

「んっ……」

変な感覚だった。痛みではない。でも、何かが入っているという異物感。そして、奥に進むにつれて、妙な感覚が——

「ここだ」

神崎の指が、陸の体内の何かに触れた。瞬間、陸の体がびくんと跳ねた。

「あ、あっ……！」

「前立腺だ。ここに異常がないか確認する」

神崎の指が、その場所をぐりぐりと押す。陸の体が勝手に震える。おかしい。こんなの、検査じゃない。でも、教官の言うことだから——

「お前、敏感だな」

神崎の声に、妙な響きがあった。指の動きが、少し早くなる。前立腺を刺激するたびに、陸の体が反応する。そして、気づいてしまった。

自分のペニスが、硬くなっている。

「やっ……やめ……」

「何だ？ 何かおかしいところがあるのか」

「ち、違います……」

「では、続ける」

指が動く。陸のペニスから、透明な液体が垂れ始めた。先走り。こんなの、見られたら――

「ふむ」

神崎が指を抜いた。陸はほっとした。これで終わりだ。でも――

「桜井、勃起しているな」

冷たい声で指摘された。陸は全身が硬直した。

「も、申し訳ありません……」

「謝る必要はない。生理的な反応だ。だが、これも検査が必要だ」

「け、検査……？」

「ああ。勃起機能と射精機能の確認だ」

神崎の手が、陸のペニスを掴んだ。

「あっ……！」

陸の声が、医務室に響いた。

神崎の手は大きく、陸のペニスを完全に包み込んだ。ゴム手袋の表面に塗られたローションが、ぬるぬるとした感触を生んでいる。

「サイズを確認する」

神崎が冷静な口調で言いながら、陸のペニスの根元から先端までを測るように撫でた。陸の体がびくんと震える。

「長さは……十四センチ程度か。平均的だ」

まるで実験動物を観察するような口調。でも、その手の動きは明らかに――

「次は、包茎の有無を確認する」

神崎の指が、陸のペニスの皮を掴んだ。そして、ゆっくりと下に引っ張る。

「う、ああっ……」

亀頭が露わになる。敏感な部分が空気に触れて、陸の腰が震えた。

「完全に剥ける。問題ないな」

でも、神崎の手は皮を下げたままだ。そして、もう片方の手の指が、露出した亀頭に触れた。

「ひあっ！」

陸の体が跳ね上がった。亀頭は敏感すぎる。特に、こんな風に直接触られると――

「敏感度も確認する。亀頭を刺激したときの反応を見る」

神崎の指が、亀頭の先端をくるくると撫でる。そこから溢れ出ている先走り液を、指で広げるように塗りつけていく。

「や、やめて……お願い……」

「検査だ。我慢しろ」

陸は必死で声を殺した。でも、体は正直に反応してしまう。ペニスがさらに硬くなり、先走り液がどんどん溢れてくる。

「先走り液の分泌量も多いな。健康だ」

神崎の手が、陸のペニス全体を握り直した。そして、上下に動かし始めた。

「あ、ああっ……な、何を……」

「射精機能の確認だ。正常に射精できるか、精液の量と質を調べる」

「そ、そんな……」



「これも必要な検査だ。隊員として、生殖機能に問題があってはならん」

神崎の手が、リズミカルに動く。ゆっくりとしたストローク。亀頭を握りこむように、そして根元まで下がる。シュコ、シュコ、と湿った音が響く。

「んっ、あっ、あああっ……」

陸は声を抑えられなくなっていた。快感が、下半身から全身に広がっていく。こんなの、自分でやるのは全然違う。他人の手で、しかも男の手で――

「感じているな」

神崎の声が、妙に低い。

「も、もう……や、やめて……出ちゃう……」

「出せ。それが目的だ」

手の動きが速くなる。亀頭を強く握り、そして緩める。その繰り返し。陸の理性が、どんどん溶けていく。

「あっ、あっ、ああああっ……！」

限界だった。陸の体が硬直し、ペニスが脈打った。そして――

「出る、出ますっ……！」

白濁した精液が、勢いよく飛び出した。ドピュ、ドピュッ、と何度も。診察台の上に、白い液体が飛び散る。陸の体が、射精の度に震える。

「んあああっ……」

長い射精だった。神崎の手は止まらず、最後の一滴まで絞り出すように動き続ける。陸の意識が白く染まる。

やがて、射精が終わった。陸は荒い息をつきながら、四つん這いの姿勢で崩れ落ちそうになった。でも、神崎の手がまだペニスを握っている。

「量は正常。色も問題ない」

神崎が、何事もなかったかのように分析する。そして――

「だが、まだ検査は終わっていない」

「え……？」

「射精後の敏感な状態での反応も確認する必要がある」

神崎の手が、再び動き始めた。

「あ、ああっ、だ、ダメ、やめて……！」

射精直後の敏感な亀頭を刺激される。痛みに近い快感。陸の体が激しく震える。

「や、やめてください……もう無理……」

「我慢しろ。これも訓練の一部だ」

神崎の手が、容赦なく陸のペニスを責める。亀頭を指先で転がし、裏筋を爪で軽く引っ搔く。陸の目から涙が溢れる。

「ああっ、ああああっ……！」

快感なのか、苦痛なのか、もう分からない。ただ、神崎の手から逃れられないという事実だけが、陸の頭を支配する。

どれくらい時間が経ったのか。やっと、神崎の手が離れた。

「検査終了だ」

陸は診察台の上で、糸が切れた人形のように脱力していた。全身が汗で濡れ、呼吸が荒い。

「立て」

神崎の冷たい命令。陸は震える手足で、なんとか立ち上がった。自分の精液で汚れた診察台が、視界に入る。

「結果を伝える」

神崎が陸の目をまっすぐ見た。

「お前は体力的には平均以下だ。筋力も足りない。敏感すぎる体質も、隊員としては問題だ」

「.....はい」

「よって、特別訓練が必要だと判断する」

「と、特別訓練.....？」

「ああ。お前専用の、特別なメニューだ。俺が直接指導する」

神崎の目に、何かが光った。陸は背筋が凍るのを感じた。

「今後、定期的にこの医務室に来てもらう。お前の体を、一人前の隊員にふさわしいものに作り変える」

「わ、分かりました.....」

陸は頷くしかなかった。これが命令なら、従うしかない。

「服を着ろ。今日はこれで終わりだ」

陸は震える手で服を拾い、着始めた。神崎の視線が、ずっと自分を見ていた。

「桜井」

「は、はい」

「お前は見込みがある」

「.....え？」

「俺が責任を持って、鍛えてやる。期待しろ」

その言葉が、陸には全く嬉しく聞こえなかった。

医務室を出たとき、陸の足は震えていた。廊下を歩きながら、さっきのことを思い出す。神崎の手の感触。あの冷たい目。そして、自分が声を上げて――

「何だったんだ、あれは.....」

小さく呟く。でも、答えは出ない。

これから自分に何が起こるのか。陸には想像もつかなかった。ただ一つ分かったのは、今日から自分の生活が、大きく変わってしまったということだけだった。

夕暮れの空が、訓練所を赤く染めていた。

(第1話 終)

新兵訓練所～教官に仕込まれる二等兵～

第2話「集団の中の孤独～シャワー室の洗礼～」

入隊から三日が経った。

陸は毎朝五時に起床し、点呼、清掃、そして午前の訓練をこなしていた。腕立て伏せ、腹筋、ランニング。体力には自信があったはずなのに、訓練所のメニューは想像以上に厳しい。

それでも、陸は必死で食らいついていた。弱音を吐かない。それがここでのルールだ。

問題は、神崎教官だった。

訓練中、彼の視線が頻繁に陸に向けられる。他の新兵を指導しているときでも、ふとした瞬間に陸を見る。その視線が、あの日の医務室を思い出させる。

陸は、まだあの感覚を忘れられなかった。神崎の手に触れられたときの、あの屈辱と、そして——自分の体が反応してしまったこと。

昼休み。食堂で支給された食事を食べながら、陸は隣に座った工藤と話していた。

「なあ、桜井」

工藤が箸を動かしながら言った。

「お前、教官に目えつけられてるよな」

「……気のせいだと思う」

「いや、絶対そうだって。訓練中、お前ばかり見てたぜ」

陸は黙って飯を口に運んだ。認めたくなかった。でも、工藤の言う通りなのかもしれない。

「まあ、頑張れよ。俺は適当にやり過ごすタイプだから」

工藤が笑った。明るい笑顔。この男は、どこか要領がいい。陸はそう感じていた。

「ところでさ、お前、初日に健康診断受けたんだろ？ どうだった？」

「普通だったよ」

陸は視線を逸らした。工藤に、あのことは話せない。

「そっか。俺もそろそろ受けるんだよな」

工藤が首を傾げる。陸は、何も言わなかった。

午後の訓練は、障害物競走だった。

泥だらけのコース。壁を越え、ネットをくぐり、丸太を運ぶ。陸は必死で走った。途中で足を滑らせ、泥に顔を突っ込んだ。他の新兵たちの笑い声が聞こえる。

悔しい。陸は立ち上がり、また走った。

訓練が終わったとき、全員が泥と汗にまみれていた。神崎が全員を集める。

「よくやった。今日はここまでだ。シャワーを浴びて、夕食まで自由時間だ」

新兵たちが、ほっとした表情を浮かべる。陸も同じだった。早くシャワーを浴びて、この不快感から解放されたい。

共同シャワー室に向かう。他の新兵たちと一緒に、廊下を歩く。工藤が隣で、何か冗談を言っている。陸は適当に相槌を打った。

シャワー室のドアを開ける。広い空間。壁には十五個ほどのシャワーヘッドが並んでいる。床はタイル張りで、排水溝が中央にある。

新兵たちが次々と服を脱ぎ始める。陸も制服を脱ぎ、ロッカーに入れた。全員が裸になり、シャワーを浴び始める。

温かい湯が体を流れていく。陸は目を閉じて、一日の疲れを洗い流そうとした。泥が水と一緒に流れ落ちる。少しずつ、体が軽くなっていく。

その時、ドアが開いた。

「全員、動くな」

神崎教官の声だった。

シャワー室が一瞬で静まり返った。新兵たちが、一斉に振り返る。神崎が制服姿で、入口に立っていた。その後ろには、立花副教官もいる。

「訓練終了後の衛生管理チェックを行う」

神崎の声が、シャワー室に響く。

「貴様ら、体をきちんと洗えているか？ 訓練所では、不衛生は許されん」

新兵たちが顔を見合わせる。陸も、何が始まるのか分からなかった。

「特に」

神崎の視線が、陸に固定された。

「お前だ、桜井」

陸の心臓が、どくんと跳ねた。

「他の者は訓練を続けろ。桜井、前に出ろ」

「は、はい……」

陸は震える足で、神崎の前に歩いていった。全裸の状態で、他の新兵たちの視線を浴びながら。工藤の目も、自分を見ている。

「お前の体、まだ泥が残っているな」

神崎が陸の肩を掴んだ。確かに、陸の体にはまだ泥が少し残っていた。でも、他の新兵も同じはずだ。なぜ自分だけが――

「衛生管理は隊員の基本だ。きちんと洗えていない者には、指導が必要だ」

神崎の手が、陸の顎を掴んで持ち上げる。

「お前たちも見ておけ。これが正しい体の洗い方だ」

他の新兵たちが、シャワーを止めて見ている。陸の顔が、羞恥で熱くなった。

「立花、道具を持ってこい」

「はい」

立花副教官が、バケツと大きなスポンジを持ってきた。バケツの中には、石鹸水が入っているようだった。

「桜井、動くな」

神崎がスポンジを石鹸水に浸し、陸の体に押し当てた。

スポンジが、陸の首筋を撫でる。

泡立った石鹸水が、肌を滑っていく。神崎の手つきは丁寧だが、容赦ない。首、肩、胸。全身をくまなく洗っていく。

「見る。こうやって、隅々まで洗うんだ」

神崎が他の新兵たちに向かって言った。陸は、他の隊員たちの視線が自分に集中しているのを感じる。工藤も、じっと見ている。

「特に、この部分だ」

神崎のスポンジが、陸の脇の下を洗う。ごしごしと、執拗に。陸の体がくすぐったさで震える。

「や……」

「動くな。まだ終わっていない」

スポンジが背中に回る。肩甲骨、腰、そして――尻。

神崎の手が、陸の尻をスポンジで撫でる。円を描くように。陸は唇を噛んだ。こんなの、他の人に見られながら――

「尻もきちんと洗え。ここは汗が溜まりやすい」

スポンジが尻の割れ目をなぞる。陸の体がびくんと震えた。